

---

# 春風伝

宵待 瑞咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春風伝

### 【Nコード】

N1900Z

### 【作者名】

宵待 瑞咲

### 【あらすじ】

今から遠い遠い昔、世の中がひと通り落ち着いた碧龍十二年。年に一度行われる宮廷女官試験から物語が始まる、十八歳の新人女官と彼女らを支える見習いたち、そしてそれらを取り巻く人々の物語。部署も性格も才能も違う女官たちの間に、強い信頼関係が築かれていく。

(・・・と書くとおカタイ小説に見えますが、実際そついう箇所は3割ほどです)

## 「春の章」(前書き)

この「春風伝」は当サイトへの書き下ろし・・・ではなく、高校時代立ち上げた文芸同好会の夏号(時期は文化祭。

せっかくだから古典モノでも書いてみよーとなり怒涛の忙しさの中)で執筆したものです。「春風伝」の名の由来は、話の

はじまりが春だから、というのと「伝」(例えば紅茶花伝とか)とついていればとりあえずカッコつくかな〜という大変ヨコシマな理由から来ています。(なんじゃそりゃ)

たいしてその時代についての知識もないまま突き進んだ嘸ですが、お付き合い頂ければ幸いです。

よいまち  
宵待  
みずさ  
瑞咲

## く春の章く

鳳ほう 瑞蓮ずいれん …十八歳の東宮女官。ささやかな贅沢を愛し、年下を思いやる人物。

しかし時と場合により、その対応に多大な差が生じることがある。

鳳ほう 愛蓮あいれん …十五歳の女官見習い。ひよんなことから瑞蓮に仕える。

基本は真面目な少女だが、すこし腹黒く、

強かな面がある。

郷きょう 桃苑とうえん …瑞蓮と同期で、仲良しの西宮女官。料理もさることながら、甘美

な声と容姿、絵画の才能の持ち主。

里り 杏苑きょうえん（杏林きょうりん） …十六歳の女官見習い。宮中に入る前は杏林という名。

自分の腕が認められたことを

誇りに思っている。  
胡こ 優奏ゆうそう …十八歳の南宮女官。…以上の高い知識と教養を持つ。

人付き合いが苦手だが、景音を拾うなど解消に努

力している模様。

琴きん 景音けいおん …優奏の補佐十五歳。成績劣悪で宮中追放寸前の所を優奏に拾われた。

書庫の整理をしながら詩文や法、医学を優奏から

学ぶ。

清せい 玲蘭れいらん …艶やかな気品が漂う十八歳の北宮女官。花形妓女を母に持ち、

雅楽の名手。憧れを抱かれ、見習いたちに追わ

れるが…。

泉 玉蘭 …… 比較的控え目な十五歳の女官見習い。しかし観察眼が効く

等の内なる能力を認められ、玲蘭に続く身となる。

その他・・・東宮女官・ 艶 翠玲 瑯 明緋（見習い）＊鴉  
朱羅（先輩）

筆頭女官・・・煌 星琳（朱羅と同期）

今から遠い、遠い昔。世の中が一通り落ち着いた平穩の時代。  
栄華を極めた宮廷では何千人もの人間が働いていた。

- この囁は、ここ宮中で起こった、春風のような出来事

碧龍十二年、宮中女官試験及第者 - 首席、胡 優奏

南宮：郷 桃苑 西宮：鳳 瑞蓮 東宮：清 玲蘭 北宮。

貼り紙の前で肩を抱き合つて喜ぶ者もいれば、泣きながら座り込んでしまう受験者たちもいる。三月の風は勝った者には心地良く、敗者には厳しく冷たい。毎年百人を超える受験者たちの中で、女官になれるのは基準を満たした上の上位五十人。かつては基準を満たせば全員合格だったが、先代の筆頭女官が「毎年百人も入ってこられちゃ面倒見切れません。何とかして下さい。」と王に大変余計な懇願をしたために、泣きながら荷物をまとめて出て行く見習いの数が三倍に増えた。

女官試験に合格した東宮の一人、鳳瑞蓮は女官服の伝票を及第者から集め、仕立て部屋に持っていく。 宮中が上がって九年。ここが瑞蓮の家。

「朱羅様。及第者たちの寸法票です。」瑞蓮はそう言いながら仕立て部屋の戸を開けた。

「おお、朱羅様、なんかすごいことになってませんか？」

その声にモソモソと布の山が動いた。紫、碧、翠、黄、朱、紅、桃色とりどりの艶やかで美しい布たち。それらをかき分けるようにして出てきたのは鴉朱羅。瑞蓮の先輩女官である、「お、瑞蓮お帰り。んん？つてことはアンタ女官試験通ったんだ？」 「一応通りましたよ。それも首席で。（ささやかな自慢）…あ、さては星琳様と賭けしたんでしょう。」いかにも朱羅のやりそうなことだ。

「ちえっ、銀十枚が水の泡…つまあ、とりあえずおめでとさん。ほらほら早く伝票貸してよ。これから縫わなきゃ間に合わないよ、明緋と翠玲呼んできて。…こういう時見習いいると楽だよな、瑞蓮。」

「朱羅様はただいじくりまわしてただけでしょう。」

幼い見習いが入った時と女官試験合格発表の後、衣服全てを取り仕切る東宮は布まみれ糸まみれになる。瑞蓮と朱羅は人生の半分以上その光景をずっと見てきたのだ。

「東宮は淡紫・紫で十五人、西宮は紅梅・蘇芳で十五人、南宮は浅葱・縹で十一人、北宮は萌黄・木賊で十人…あれ？南宮が一人多いんじゃないの？」

朱羅がそんな事を呟きながら首をかしげていると小さな来訪者が八歳になったばかりの可愛らしい見習い、えん 艶、すいれい 翠玲とろう 瑯、めいひ 明緋だった。二人は無邪気な高い声で

「朱羅様、筆頭女官の煌星琳様がお呼びです。…朱羅様にトクベツな用があるとおっしゃってました。キギヨウヒミツだからナイミツにして欲しいと言われました。あ、あとカケの事はチャラにして下さるそうです。」

く特別な用・企業秘密・内密・賭け・ちゃら：幼子だからこそ堂々とと言える言葉。

「賭け、ちゃら」の言葉で一瞬にして朱羅は星琳の所へ走って行った。

\* \* \*

「煌星琳様、東宮殿の鴉朱羅様がおいでになりました。」  
「通しなさい。」

凜とした声が部屋に響く。朱羅は乱れた組み紐を結びなおすがますます変になってしまった。どうとでもなれと開き直って部屋に入る。

上等の布で作られた鮮やかな色の女官服。紫紅碧翠の綾糸で織られた組み紐は若くして四方の部署をまとめる筆頭女官の証。腰に結わえられた雅な珠が玲々と音を立てる。朱羅はかつては共に学んでいた同い年の女官に礼をする。星琳はそんな彼女を懐かしそうに見下ろすと、ゆっくり口を開いた。

「朱羅、今回の女官試験の合格者数、何か変だと思わなかったか？」

「はい、南宮のみ、例年よりも一人多いのではないかと。」朱羅はうつむき加減に答える。

「その通り。南宮はいつもなら十人入れるが今回は特別だ。なにぶん事情が複雑なものでな。：それでお前に頼みがある。見習い時代に数多の危機を救ってやった借りを返してもらいたい。十一人目の南宮女官の女官服を誰にも知られずに縫いなさい。」

縫いあがったら瑞蓮に渡して私の所へ持ってこさせるように。これが見本だ。」

「：なぜ私でなく瑞蓮に運び役を？」  
「決まってるだろう、可愛い瑞蓮に会う口実だ。」

ムチャクチャな事でも堂々と口にする星琳に、朱羅は返す言葉がなかった。そして三日、朱羅は部屋に缶詰めになり、着る人の顔も知らない女官服を縫った。

\* \* \*

「出ていきなさい！今すぐに！ほら早く！」琴の音が響きわたる見習いの修練場で一人の見習いが教育係の女官に叱責されていた。琴の中でもっとも簡単な「香花春」ですら弾くことができない。他の皆は難なく弾けているのに…。琴景音は自分の名前さえもが情けなくなつた。自分が好きなのは琴なんかではないのに…。恥ずかしさと情けなさで顔が真っ赤になつた景音は腕を乱暴に引つられて修練場から追い出されてしまった。泣きながら何処に行くあてもなくふらふらと放浪していると、猛烈にお腹が空いてきた。しかも泣き疲れて眠い。ここで倒れたらどうなるかと考える余裕もなく、景音は地面にパタリとうつ伏せに倒れてそのまま死んだように動かなくなつた。そつと歩み寄つた大きな影には当然気がつく…。訳がない。

\* \* \*

十一人目の南宮女官は南宮の庭を歩きまわつていた。

南宮の女官の中で一番の才能と知識を持つものなのに全然存在を知られていない。

正式な見習いの段階を踏まずに来たため、南宮女官試験だけでなく、科挙の問題も解かされた。あの家系で育つた自分にとってはそんなに難しいものではなかつたのだが。

任命式にも当然出られないだろうな、そう考えながら彼女 胡優奏は眼を伏せ、はあ…とため息をついた。その時、彼女の目に黄色の物体がちらりと映つた。

「…見習い？」優奏は切れ長の瞳をついと細め、焦点を合わせる。紺の女袴に山吹色の上衣を纏つた人間が地面の上にパタリと倒れたままびくともしない。「そういえば、私の所には見習いが一人も来なかつたなあ…。」そう呟いて、優奏はゆき倒れになつた見習い（？）の救出作戦に取りかかつた。

\* \* \*

「もう勘弁して　っ！！。」一人の新人女官が北宮殿の上から下へ、右から左へと走っていた。「こ、こんなに申し込みが来るとは思ってたかった…。」年下の見習いが沢山いる中で、二次試験（弦楽）の練習なんかしたからだろう。「ひっそり隠れてやればよかった　！！」  
北宮女官、清玲蘭、心の叫び：しかし時すでに遅し。

「玲蘭様、どうか私を玲蘭様の助手に！！」そんなことを叫びながら山吹と紺の集団がしつこく追いかけてくる。組み紐は北宮であることを示す翠。

（宮中では新人女官は一つ年下の見習いの内から一人助手を選び、姉妹関係を結ぶ）

それだけ慕われているのだ：ここまで来ると迷惑以外の何物でもないが。

任命式前の新人女官が着る白い衣をバタバタとなびかせながら玲蘭はやつとの思いで自室に辿り着き、入って瞬時に錠を下ろす。こうなってしまうえば流石に見習いたちも「今日の所は」と帰っていく。格子の間からその様子を見ていた玲蘭の目に庭で一人、ポツンと二胡を弾く見習いの姿が映った。  
組み紐の色は　翠。

\* \* \*

琴景音は爆睡していた。素性も知れぬ年上の人間の部屋で大の字になつて寝ていた。

静かな琵琶の音が心地よくてそのまま寝入ってしまったらしい。その清々しいほどくつろぐ姿を見ながらこの部屋の主、胡優奏はそつと部屋を出た。気が付いたら昼食の時間を過ぎていたのだ。「運んできてくれないのなら、自分で頼みに行くしかないか…」

優奏は女官とも官吏ともいえぬ出で立ちで食事関係を取り仕切る西宮へ向かった。

西宮　、忙しかった昼食の時間が過ぎ、夕餉の支度までの愉しいひととき。

東宮の瑞蓮はさつき助手にした見習いの愛蓮を連れて西宮で働く友人を訪ねた。

「東宮の鳳瑞蓮です。郷桃苑様はいらっしゃいますか。」白い衣の長い袖から小さな包みを取り出して友が来るのを待つ。程なくして瑞蓮の前に同じぐらいの背格好の女官が現れた。美しく艶やかな碧みどりの黒髪。雪のように透き通る白い肌。桃の花そっくりの優しい色をした頬と唇。「瑞蓮」その女官　郷桃苑はふんわりと微笑った。

「桃苑、女官試験首席及第おめでとう。はい、これ。お祝いの四色絵の具。」

瑞蓮は箱を桃苑に渡す。紫、碧、翠、紅の鮮やかな色に桃苑の顔が輝く。

「うれしいわ、ありがとう、瑞蓮。これでまた絵を描いてあげる。」その時だった。

「ん」「ん」ふと二人は周囲の異様な雰囲気気付いて後ろを振り返った。

桃苑が漆黒の双眸をついと細める。彼女の視線の先にあったのは、見たことのない官服を身に付けた背の高い人物。濃き色の袴と白い上衣は同じだが、縹でも浅葱でもない碧い上衣と黒生絹すずしの衣。「あの人、女官…？」桃苑の言葉に、瑞蓮は「あ」と何かを思い出したかの様な声をあげた。「私、あの服を朱羅様から預かって、星琳様に届けたんだっ…。」朱羅が皆が寝静まった頃も一人針仕事に励み、「絶対に中を見るな」の言葉と共に渡されたが、見るなどと言われると見たくなるのが世の常人の常。誰かさんの（男をたぶらかすための）勝負服が入っていると想ったら、見えたのは地味な黒と碧の布地だった。首を捻りながらもそれを星琳に届けにいった折に、星琳から愛蓮を紹介された。見習いを新人女官と引き合せ

るとは：流石は若手筆頭女官。瑞蓮は愛蓮を気に入り、助手にすることにした。

「・・・で？桃苑、アンタまだ助手の子付けてないの？」西宮女官の試験を第一位で突破した桃苑だ。多くの見習いが助手につきたいと思うだろう。（玲蘭の場合は度が過ぎてているが）「それがねー、なんか敬遠されちゃってね。」彼女の話によると、「あんなにデキる桃苑様とつりあつて助手なんてとんでもない。」という負の雰囲気が見習いの中に蔓延しているらしいのだ。

例の黒衣の人間が、傍で野菜を洗っていた見習いの少女に何か話している。

少女は言われたことをしつかり頭に入れるかのように頷いていた。その人が去ると、彼女は桃苑の所へやってきて、やや緊張しながら礼をとる。「桃苑様、さきほど、その：南宮のユウソウ様が、昼食が来ていないと仰って：塩分をひかえたものを出してほしいそうです。それで：出来上がったなら離れの部屋にいるから、そこに持ってきてほしいと仰ってました。」「ユウソウ：？瑞蓮、ユウソウって、あの、首席及第の？胡優奏？」

桃苑はいつもの倍の速さで食事を準備する。各所で余っていたご飯をかき集めて、おにぎりを作った。塩分が少ないものと頼まれたので、溶き卵と椎茸と三つ葉を入れたお吸い物を加えた。少女がてきぱきと手伝ってくれたので非常に仕事がかどった。

出来上がった膳を桃苑はその少女と共に南宮の離れに向かった。

「ねえ」桃苑は思い切つてその少女に話しかける。

「は、はい」少女は驚きを隠せない様子で、桃苑の方へ顔を向ける。

「名前は？」 里杏林、とその少女は小さな声で名乗った。

\* \* \*

玲蘭はその見習い女官を暫く観察していた。

少し癖のある、ふんわりと肩にかかる髪。二胡を静かに弾く手は丁寧に入られされている。伏し目がちの瞳にはけぶる様な長い睫毛。小さな唇。

顔的にはなかなか美人と見た。皆と群れずに一人で慎ましく練習する様子も気に入った。

今なら練習の時間だから、追いかけてくる見習いは多分いないだろう。玲蘭はそつとその見習いに近づいて行った。 「何か御

用でしょうか？」 泉玉蘭の完璧な礼と声に、玲蘭はますます彼女を気に入ってしまった。

\* \* \*

「杏林」 「は、はい」 「あなた十六よね？あなたの周りで新人女官の助手になった子はある？」 南宮に食事を届けた帰り道、桃苑は杏林に聞いた。

「はい…私の知っている限りでは、湊月、珀珠、瑛明が麗泉様、紅陽様、光夜様の助手になりました。」 「ふむ」この三人…いずれもそこそこの女官たちだ。自分の方が先に（しかも簡単に）助手の子を見つけられると思っていたのに、アツサリ先を越された。

「で、杏林は仕えないの？」 桃苑はズバリ聞いてきた。

「私が…ですか。目もくれられてませんでしたよ。」 杏林はしょぼんと頂垂れる。

「私も…逃げられた。逃げられたもの同士、一緒にならない？」 杏林のつぶらな瞳が一気に見開かれる。「えっっ？？？は！？あの、その…私がととと桃苑様にお仕えしてもよろしいのですか？」まさかの発言に動揺しているようだ。

「そうしてくれれば嬉しいわ。あなた結構筋が良いし。」 そう笑顔で言った桃苑に、

杏林は心からの恭順の礼を示した。迷いなど何もなかった。

\* \* \*

「…？」 ふと目を覚ました景音はすぐに、自分が未知の場所にいる

ことを悟った。

ポツンと離れた小さな部屋……。ここは……

「目が覚めたか。」低い声にハツと振り向くと、見たことのない官服を着た人が静かに座って書物を読んでいた。景音は碧と黒の官服を見ながら何処の部署の女官だろうと考えを巡らせていた。  
・  
・いや、その前にこの人の性別は何だ。

すらりと背の高い身体。きりりとした顔立ち。変わった色重ねの官服。ぶつりと切られたような短い髪の毛。そして何より目を惹いたのは両手の甲に刻まれた左右対称の刺青。

「えーと、あの……」私は何でここにいるんでしょうか、と景音が尋ねる前に、食事がのった膳をズイと押し出された。「庭で倒れるぐらいなんだからよっぽど腹減ってたんだらう?」……どうも食べるというところらしい。なんだかんだ言って、景音は昼間から何も食べていないので、彼女は有難く食事を頂いた。

食べ進むうちに記憶が次第に甦り、すぐに自分がなぜここにいるかを思い出した。

「えーっと、私、『香花春』ですら弾けなくて、それで修練場追いつ出されて……あれ?」

「道端に死んだ様に倒れてたから私が拾ってきただけだ。捨てておく訳にもいくまい。」

その人は今まで読んでいた分厚い書物をパタンと閉じると、景音の方へ歩み寄った。その雰囲気には何らかの恐怖を感じた景音は山吹色の袖をギュツと握りしめる。しかし、その手はその人によって軽くほどかかれてしまった。

「私は胡優奏。南宮女官試験首席及第者だ。」

\* \* \*

「玉蘭、何であなた、一人で練習してたの?」玲蘭はさっきから気になっていたことを尋ねた。それに対し玉蘭は凜と落ち着いた声で

答える。「一人が、好きなのです。」

「あら、珍しい。」 「私は基本的に大人数でがやがやするのが大嫌いなんです」

「私と同じね。」 「でも…私を必要としてくださる方になら、心からお仕えしたいと思つています…まあ無理ですね。」 「無理じゃない…かもよ？」 「え？」

「私、あなたが欲しいもの。」 「玲蘭様？私なんかでよろしいのですか？私よりも綺麗で、出来が良くて、もつと目立つ子が見習いの中には沢山いるんですよ？」

そんな玉蘭に玲蘭は妖艶な笑みを浮かべてその手を取った。

「さつきも言つたでしょ？私は群れている中にある目立つ子が嫌い。」

そのひと言に玉蘭が初めて笑顔を見せた。玲蘭と対照的な、爽やかで軽やかな笑みだった。

\* \* \*

「瑞蓮様」 「はい？」 「何か私だけ、説明すつ飛ばされてませんか？」

「何の？」 「私…凰愛蓮がなぜ貴女の助手になったか」 「別にさう、美しい縁とかじゃないでしょ？それでも良いわけ？生みの親も書くのめんどくさいってさ。」

「あの人は今イカ燻製むさぼりながらこれ書いてるんですよ、それぐらいの労働、させても問題ないでしょう？私の名誉の為に話していたかかないとカツコがつきません」

「あーはいはい。分かつた分かつた。それでは？TR、スタート！」 (by宵待&瑞蓮)

回想風景

このやり取りの二刻ほど前、筆頭女官の星琳は女官服の袖がほつれていたことに気付き、目に付いた見習いの子を勝手に引きずりこみ、

絹糸で縫い合わさせていた。その哀れっ子が鳳愛蓮。黙々と真剣に筆頭女官様の官服を繕っている愛蓮に、星琳は暇つぶしに話しかけてみた。「仕えたい女官はいるのか？」 「いえ、めっそもございませぬ。」

緊張のあまり超頓珍漢な回答。「そんなこと考えてもいませんでした。」と言いたいらしい。そこで、星琳は愛蓮に「鳳瑞蓮という名の女官を知っているか？」と訊いてみた。

「はい、私とよく似た名前の方なので、存じております。」そんな会話を交わしていると、すすすと桐の戸が開き、白い衣を着た一人の東宮女官が入ってきた。風呂敷包みを側において、両手の甲を額に当ててゆっくりと跪き、頭を垂れる。目上の人間に対する最高礼だ。「よく来た、瑞蓮。」星琳はお気に入りの女官に向かって微笑んだ。

「星琳様、お目に掛かれて嬉しゅうございます。朱羅様よりお預かりした官服です。どうぞお確かめください。」 瑞蓮は恭しく風呂敷包みを星琳に差し出す。

星琳はそれを大事そうに受け取ると、隅っこでちんまりと座っていた愛蓮を呼んだ。

「瑞蓮、まだ助手を選んでいないだろう？」 「はい」

「この子…鳳愛蓮なんてどうかかな？」 「え？」 「え？」二人の蓮は顔を見合わせる。

筆頭女官の星琳が推す人物だ。多分大丈夫だろう、と二人は合意し、主従関係を結んだのだった。こうして、東宮女官試験首席及第者 鳳瑞蓮と見習い 鳳愛蓮が誕生した。

「はい、終わり。あー疲れた。（宵待&瑞蓮）」 「えっ  
！？中身薄っ！！」

\* \* \*

宵待の大変な手抜きを、どうかご容赦くださいませm(。 )m

「胡優奏様…」この間の女官試験で、全員共通の一次試験と各部署ごとの専門試験の首席及第者。随分と騒がれたけど、誰も彼女の存在を詳しく知らなかった。短い髪の毛。深く刻まれた刺青。知的な瞳。いかにも何でも出来そうだ。

「琴景音だったな…何故修練場を追い出されたんだ？」 優奏は医学書を読みながら景音に訊ねた。

「そ、それは…あの、私は見ての通り、南宮の見習いなのですが、学問や地理、整理の他は何一つダメで…修練中に習う音楽、料理、裁縫の成績があまりにも悪すぎて、追い出されてしまいました。今までのこれていたのが不思議なぐらいですけど。」

景音は恥ずかしそうにその経緯を優奏に述べる。

「そうか。しかし追い出すとは少々手荒だな。…景音。学問ならいけると言ったな。医術の方に興味はあるか？」 「何故です」

「もし私に仕えるとしたら、知っておかなくてはいけないからだ。」

「え…？」

「私は心臓に持病がある。だから隠れるようにして育てられた。私の家系は時と場合によって何の職種にもなれるように様々な経験や修行を積む一族だった。…生まれた子が健康ならば作業や労働も出来るが、私にはそれができない…。」

「それは…心臓がお悪いせいですか。」 優奏は頷くと手の甲の刺青を撫でた。

「私の家族も、私を救ってくれた人も、もういない。私の身体もいつも万全とは言えないし、いつ又倒れるかも分からない。でも、この宮中で、自分の力を精いっぱい役立ててみたい。それには私を支えてくれる人が必要なんだ。景音、お前にその覚悟があるのなら、私の側においてほしい。」

側にいてほしいと思った。身分も、外見も、過去も関係なく

優奏の告白を景音はいつになく真剣な顔で聴いていた。そのあと彼女は優しく微笑むと、刺青が施された優奏の手を静かに取った。「私が、力の限り優奏様をお支えます。ですからご安心くださいませ。」 優奏の瞳から、きらきらひかる雫がこぼれおちた。

\* \* \*

「ではこれより、碧龍十二年、女官任命式を行います。」  
各部署の女官長達が新人女官の名前を一人一人読み上げる。  
紫の東宮・紅の西宮・碧の南宮・翠の北宮。  
それぞれの色で晴れの日を迎えた女官たちの顔は、誇りと喜びにあふれていた。

「それでは最後に…各部署の首席及第者とその補佐、前へ。」

その声で、静かに女官の列から四人、見習いの列から四人が進み出る。

- 「東宮首席 鳳瑞蓮。補佐、凰愛蓮」
- 「西宮首席 郷桃苑。補佐、里杏林改め杏苑」
- 「南宮首席 胡優奏。補佐、琴景音」
- 「北宮首席 清玲蘭。補佐、泉玉蘭。」

「以上八名。では星琳様より一人ひとりにお言葉を。」  
最上等の女官服を立派に着こなした星琳が、黒木の椅子から立ち上がる。

「鳳瑞蓮。これからも仕事に誇りを持ち、日々精進に励むよう。」  
「仰せの通りにいたします。」  
「郷桃園。長年の努力と経験が実を結んだこと、心から喜ばしく思う。その努力を絶やさないよう。」  
「胡優奏。類希なる才能と知識、この地で存分に発揮するよう。」  
「出来る限りの事をいたします。」  
「清玲蘭。幼いころより磨き上げた技術は尊敬に値する。これからも皆の良き手本になるように。」  
「有り難きお言葉にございます。」  
四人の女官が最高礼をとった。

「鳳愛蓮。瑞蓮を助け、時に導くよう。」  
「お言葉通りに。」  
「里杏苑。改名するほどに桃園を慕う気持ちを忘れないよう。」  
「心にしかと留めます。」  
「琴景音。優奏への感謝と奉仕の心を忘れないよう。」  
「とこしえに御誓いします。」  
「泉玉蘭。玲蘭と共に日々切磋琢磨するよう。」  
「誠意を尽くします。」

四人の補佐たちも最高礼をとった。

\* \* \*

いつの時代も、何処の国でも、出会いはとても大切なものだ。ひよんなことから出会った人間同士が、一生の友になるのは、果たしてどのぐらいの確率だろうか。

『一期一会』で出会った者たちが、国を、世界を、変えていく……

春風伝〜春の章〜終

く春の章く（後書き）

今あなたがこれを読んでいるということは・・・私はこの世に  
・・・います。今日も図々しく存在してます）ともかくこの「春風  
伝」を

読んでくださったということですね（汗）

夏の章、秋の章と駄文をダラダラ書きつらねていく心づもり  
でいますので、どうぞお楽しみに） なにを（

## く夏の章く

愛蓮、玉蘭、杏苑、景音が瑞蓮、玲蘭、桃苑、優奏に仕えてから一月が経った。

それぞれの様子を見てみよう。

東宮。の針仕事部屋の一角。

「あの、瑞蓮様。」 「ん〜？」 「この部分はどう止めたら良いんでしょうか？」

瑞蓮と愛蓮は只今修練科目の打掛を縫っている。主に作るのは愛蓮だが、確認したり、助け船を出したりするのは女官の瑞蓮の役割である。

「ああ、ここはね、よく動く部分だから返し縫いでしっかり止めたほうがいいわ。」

彼女の指示に愛蓮ははい、と頷くと返し縫い用の待ち針を襟のところに付けた。

今回の製作は布からではなく、蚕を育てることからスタート。それでとった絹糸を染めてから機織り。出来た布に鋏を入れて打掛を作る。「布の出来方を皆で身をもって体験しよう。」と言い出した朱羅によって面倒なことが組み込まれてしまったものだ。

今、二人が作っているのは、紫の染め方に工夫を凝らした上衣と、白い生絹すずしを粗く織った紗の打掛。その両側には細かい花の刺繍が施されている。

作ったものは自分たちで使えるのをイイことに二人はこの打掛に夢と希望を乗せていた。優美な白い打掛を、似合いそうな子に着せて楽しむ。…西宮や南宮には夢の無い長さの袖にがっかりした子も多いのではないか。 一週間後。

打掛製作の課題の評価が全て出そろった夜、東宮入口に一枚の紙が貼られた。

「今夜、瑞蓮と愛蓮の部屋で新作打掛お披露目及び試着会」

きやあきやあと騒ぐ見習いたちが去った後、黒い衣を纏った人

・優奏が来て、その紙を読んでからそつと呟いた。

「着てみたいな…寸法が合うなら。」彼女の場合、問題はそこにある。  
?

夜：東宮の瑞蓮と愛蓮の部屋には三十人位の見習いたちが集まった。大抵は一番袖が短い西宮の子たちだったがちらほらと東・南・北宮の子もいた。

幼い見習いの明緋めいひと翠玲すいれいに手伝ってもらい、ひとりひとりに着せて行く。

白い生絹の打掛も刺繍も大変な好評で皆喜んで帰って行った。

「もう誰も来ませんか？」 「そうね。」二人が上衣と打掛を仕舞おうとしたとき、トントン、と戸を叩く音がした。

「?…はい」愛蓮が戸を開けるとそこには優奏がたっていた。

「南宮の胡優奏様ですね。どうされましたか？」愛蓮は女官に対しての礼をとると用件を聞いた。

優奏は紅い顔をして戸口の貼り紙の方を指差した。「ああ、瑞蓮様、優奏様も打掛をお召しになりたいそうです。」 「着ちゃ悪いのか。」優奏の顔がもっと紅くなって声が低くなる。「いいえっ!!!そんなことは決してございません!!!どうぞっ!!」愛蓮はこの状況(というよりは生命の危機)を打開する為にズイツと瑞蓮の方に優奏を押し出したのだった。

瑞蓮は離れに閉じこもりっぱなしで仕事をしている優奏参上に多少驚きを示したが、優奏に黒と青（ふつうの南宮女官は縹と浅葱）の上衣を脱ぐように言い、濃きの袴と白い下衣だけになったすらりと背の高い優奏に紫の袖がゆるりと長い上衣を着せ、真っ白な粗織り生絹の打掛をふわりと重ねる。

「…きれい」と愛蓮が思わず呟いてしまうほど、その打掛は優奏に良く似合っていた。

優奏はぐるりと自分の姿を見まわすと、照れくさそうに笑った。

「ありがとう。私の大切な人を思いだした。」彼女は美しい紫の上衣を見つめながら懐かしそうにそう呟き、部屋を後にした。

\*\*\*\*\*

「優奏様：あの、その両手の刺青はどうなさったのですか？」

優奏が帰ってきて本を読んでいた時、傍で本の整理をしていた景音は彼女に訊いた。出会った時から気になって仕方がなかったのだ。

「ああ、これか。」優奏は手の甲に刻まれた黒い刺青をそつと撫でる。

「景音、こつちに来て薬でも作りながら私の身の上話でも聴いたらいい。」

その声に景音は帳面と筆、薬箱と挿鉢を持って優奏の所に瞬間移動。

（ぴゅー）

「景音、お前は何処で生まれた？」 「明栄村です。」

「私が生まれたのは沙安というところだ。聞いたこともないだろう?」

「はい・・・聞いたことが無いですね。」学問や地理に秀でている景音でさえ、そんなところは知らなかった。

「まあ、当然だろうな・・・ものすごく奥まった所で、人が来ないところにあつたし、もうきつと人はいないだろうな。」

きよとんとした顔の景音に、「私の家族はもういない、と前に言つたな。」

優奏は静かに座りなおし、景音に両手の甲を見せる。

「この刺青を持つ人間もきつと私で最後だろうね。」

優奏は深い息を一つし、話し出した。

「私の本当の姓は芍。九つの時までには芍優奏だった。芍の意味は明らか。私の家系は庶民ではなかった。影吏という、上からの命令に従つて密かに目的地へ入り込み、情報を集めて上に知らせたり、命令に応じて行動したりする家系だった。影吏の家系に生まれた者は、乞食にも商人にも農民にも、何にでもなれるように、幅広い教養と経験を幼いころから積まなければいけない。」

私はそんな家の三番目の子供として生まれた父の名は理匠、母は慶枝、兄は雪波、姉は夏蓉、妹の英春。家族六人でつましやかだったけれど幸せに暮らしていた。秋の夜、周りが深い紺色に沈んだころだった。私は二階で自分の粉薬を紙に包んで箱に整理していた。そのそばでは十二歳の夏蓉姉上が糸を紡いでいた。糸玉を置きに行った夏蓉姉上はもう帰ってくる事はなかった。

「...どういことですか。」

「私の家系は影吏。裏世界の悪事に入り込んでそれを暴いて、その金で生活していたから向こうの世界の人間には恨まれていたんだろう。その日、私の家族はなだれ込んできた刺客に血肉の塊にされてしまった・・・。」

「優奏様は大丈夫だったのですか?」景音の問いに優奏は頷く。

「仮死状態だったからな。」

「えっ?」

「夏蓉姉上が下に降りて行った時、私は丁度最後の薬を紙に包んで木箱に入れていた。ふたを閉めて、錠を下ろしたときに・・・血飛沫があがるのが見えた。」

「う…。」景音は気持の悪さに思わず口を押さえた。

「その血の主が私の家族だと判った時、胸に激しい痛みが来て、目の前が真っ暗になりそのまま頭から倒れた。最後に記憶に残っているのは口の中に入ってきた血の味と、赤黒い血を吸い取って重くなった髪の毛の感覚だけ…。」

景音は話を続ける優奏の首筋で粗く切られた髪の毛を見つめた。十年たった今でも残る辛い記憶を引きちぎらんとする様なその髪型は優奏の苦しみを表しているかのように見えた。

「その…倒れたあとはどうやって…?」

「一晩中、私はそのまままで気を失っていた。朝になって入ってきた朝陽と共にあの方が来てくれた…私を救いだして育ててくださった

方 胡こ 陽柳やうりゅう様だ。」

\*\*\*\*\*

「生きているのなら、目を開けなさい。」それがあの方の第一声。

血と闇に沈んだ自分の手を何のためらいもなく握ってくれた。

ぴちゃり。ぬめりを含んだ赤黒い液体に塗れた九つの子供を抱き上げて、そつとその背中におぶってくれた。優奏が目を覚ました時に目に入ってきたのは、彼女の衣の背中だった。

美しい縹色と浅葱色。彼女は南宮の宮廷女官だった。

胡 陽柳はこの時二十八歳。九歳で宮中に入り、十八歳で女官試

験合格。二十歳の時ある事件がもとで宮中追放…とはいかないまでも離れて暮らす生活を強いられていた。「私はその陽柳様におぶわられて初めて宮中に入ったんだ…」  
。勿論血まみれの着物のままで。

事件の後、離れに押し込まれ、同僚からも忘れ去られていた女官が突然血を浴びた九つの子供を背におぶって現れたので宮中にいた人間は皆騒然としたが、彼女は何も言わずに洗濯場に直行して湯を沸かし、私の身体についた血を流し去った。体の方はきれいになったが、血を含んだ髪の毛はなかなか元通りにはならなかった。

長い髪は女のしるしだから…  
かつて母が私に言った言葉。

“でも母上、私の身分を知る者はもう誰もいません。  
その人たちの血をこの髪の毛が吸い取ってしまいました。断ち切りたい。断ち切って…  
イママデトハ チガウ ニンゲンニ ナ  
リタイ

陽柳様がどんなに髪の毛をお湯で流しても、ぽたぽたと流れる雫は紅を含んでいた。

「しばらくの間、私は普通の生活が出来なかった。食べ物をお口にすれば血の味が甦り殆ど戻していたし、刃物や光る物を見ただけで冷や汗が出て身体が震えた…。」  
「そうのですか…」  
景音は静かに相槌を打つ。

「心臓が悪い私はさすがに薬だけは受け付けた。陽柳様は、薬湯の中に砂糖を混ぜて、辛うじて栄養が摂れるようにしてくださった。」

「優奏。」  
陽柳はよく優奏の名前を呼び、そのたびに優しく抱きしめた。

本当の家族のように扱ってくれた。  
だからこそ、あんな依頼ができたのだ。

ある日、優奏は陽柳にこう頼んだ。「私の髪を、首筋から全て断ち切ってください。」と。陽柳は真剣な優奏の瞳をじっと見つめながら暫く考え込んでいたが、深く頷き優奏の一つに束ねられた髪の毛を大きな鋏でばっさり断ち切った。

ざくり、　　ざくり、　　ざくり、　　ざくり。

陽柳の大鋏が血のこびりついた髪の毛を身体から離していく。

優奏も陽柳もその間一言も言葉を交わさず、ただ、金属と髪が触れ合う音だけが部屋に響いた。　腰ほどまでであった優奏の髪の毛は

一つに束ねられて床におち、残り毛は紙の上に落ちていた。「その残り毛で陽柳様は何をしたと思う？」　さあ、と首を傾げる景

音の目の前で優奏は懐から小さな筆を取り出した。「筆…？、

ああ。」　血の付いていない髪をそろえて陽柳様は筆を作った。

「赤子が生まれたとき、その産毛で筆を作るといふ家はあるが、陽柳は実の親ではない。でも筆を作るといふことは、「筆を買うお金すらなかったのですか…!？」　「違う、馬鹿。私を自分の子として認めてくださったということだ」「あ、…」「ものすごい勘違いをしていた景音は自分で掘ってでも穴に入りたいと思った。気を取り直せ、自分。(景音心の言葉)

「優奏様。」　景音はゆっくりと後ろから手を回し、そっと肩を撫でる。優奏はいやとも言わずに身を任せていた。その手つきが妹の英春にそっくりだったから。生きていたら、どんなに優しく美しい少女に成長していただろう。

「…。」　優奏の切れ長の瞳の端に、涙が滲んでいた。

「きょうり…じゃなかった、杏苑」桃苑の同僚の明泉は杏苑を探していた。薬の仕分けを手伝ってもらったためだ。ここだけの話、明泉はこれがめっぼう苦手で、女官試験は桃苑のカンニングで切り抜けたという風上にもおけない人間なのだ。落ちた見習いが浮かばれない。「はい」後ろから声がして、振り向くと杏苑が立っていた。さつきまで見習いたちと一緒に明日の朝餉の下ごしらえをしていたようだ。

杏苑は明泉に向かってゆるゆると膝を落とす。女官に対する礼。紺の女袴に山吹色の上衣。そして西宮を表す紅の組み紐。そこには主従関係を結んだ女官がいることを示す珠が通されている。

「これは高麗人参。向こうの細長い箱ね。この種は皮を取ってね。明泉の指示を見ながら杏苑の感想…「このダメ女官」。年上ぶっているが、薬の知識は素人以下。見習いの自分の方がよっぽど。と口まで出そうになったがそれがもとで慕う桃苑に火の粉が降りかかったら嫌なので黙っておいた。その代わりにザクザクと薬を整理して行く。」

杏苑の知識は宮中に入ってから培われたものではない。

\*\*\*\*\*

杏林は八歳の時に宮中に入った。実家の里家は代々古くから続く医者の家系で、杏林は三番目の子として生まれた。兄の菖葉、姉の珠

桜。そして杏林。菖蒲と桜と杏、いずれも薬になる植物の名から来ているが、杏林の名前は神仙伝の故事から来ている。

昔、中国の董奉という名医が患者から治療費を取らない代わりに一本の杏の樹を植えさせた。すると数年後には見事な杏の林になった というもの。

杏林が生まれた時、父は直感したらしい。「この子は医者以上のものになる。」と姉兄と共に医術の教育を受けた。もつともつと沢山知りたい

杏林七歳の初夏。

父が過労で倒れた。起き上がるのがやっとという弱り切った身体に少しでも体力がつくようにと、杏林は自分の杏の樹から摘んできた橙色の丸い実を、珠桜と一緒に砂糖漬けにした。…が結局それは砂糖の割合が多すぎて塊になってしまい。逆に気分を悪化させそうな代物が出来上がり、母に呆れられた。

長い療養の末、父は小康状態にまで回復したが、もうかつてのように各地を回つての治療は出来ないと感じたらしく、家で外来の患者を診るにとどまるようになった。

父の負担を減らそうと菖葉と珠桜は荷物をまとめ、他所の医学所へ修業に出た。

そんな二人を見ていた杏林は、自分も何か役に立てないだろうかと考えた。

丁度そのころ、母と街へ買い物へ出かけたときに何人かの紅い服に身を包んだ少女たちが籠を持って食材を物色していた。

「母様、あのあかいふくをいているひとたちはなあに？」 「ああ、あれは宮廷女官よ。」

「きゅーていによかん？」 外の世界に関して全くもって無知（！）だった杏林に母は色んなことを教えてくれた。

宮廷女官は四つの部署があり毎年四月に見習いの子を入れること。七、九歳の女の子。

しかし女官になれるのはその三分の一。選りすぐりの少女たち。

ある日杏林が父のために庭で薬を煎じていると、父がゆっくりとした足取りでやってきた。「父様、もう少しでお薬が出来ますから休んでください。」

火の熱で顔が火照っている杏林の白い頬にふわりと柔らかいものが触れた。

父の差しだした薄紅色の杏の花。まだ寒い三月に花開く。菖蒲よりも桜よりも早く咲く杏の花。そこに込められた意味は・・・「誰よりも早く人を助けよ。」

杏林、西宮の宮廷女官になりなさい。父はそう、娘に諭した。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

碧龍四年、杏林は百五十人の見習いと共に宮中に入った。配属先は希望通り西宮。医食同源について勉強したかった杏林にとってはピッタリの部署だった。そこで八年を過ごし、杏苑と名を改めて今に至る。「えん、杏苑。もうそろそろ終わりにしましょう。」明泉の声に杏苑は我に返った。二人は西宮に戻った。

何もかも、いつも通りだったのだ。夜の帳が下りるまでは

?

南宮の離れ。優奏と景音は処分する書物の中から使えるものを抜き出して書きうつす作業をしていた。

「……」優奏は胸を押さえて、息づかいが荒い。目ざとい景音は、あとは自分がやるからと優奏を寝かせようとしたが、優奏は大丈夫の一点張りで景音は退けられてしまった。

全てうつし終わり、優奏はゆっくり立ち上がったかのように見えた  
ドサツ。

その音に景音が慌てて振り返ると。「優奏様!!」

景音は敷いてあった布団に、意識のない優奏を引きずり寝かせ、黒生絹と縹色の上衣を脱がせ、白の下衣だけにする。(これは優奏の具合が悪い時いつもやっていたことだが、毎度男を逆に襲っているような女の気分になった。)きちんと締めた袴の紐も解く。

「優奏様、待っていてください。」景音は六月の雨の中を駆けた。

\*\*\*\*\*

「優奏様が？」当番で蚕の餌やりに来ていた愛蓮は瑞蓮の話聞いて驚きの声をあげた。

「さつき医女と医務官が景音と一緒に行くのを見たの。」そう瑞蓮は言っつてひときわでかい油蚕(飴色の蚕)に葉を食べさせる。そいつにしかやっていない。

「瑞蓮様、どうしてその蚕にしか葉をやらないんですか。」愛蓮はチビ黒たちに桑の葉をやる。「だって、この子にはチビ黒の時から手をかけてるんだもん。ね、玉琥珀？」

蚕舎の中で今年十匹しか生まれなかった油蚕のうちの一匹。飴色の透き通った身体の玉琥珀は猛然と葉を食べる。「玉琥珀から糸を取

「だったら、それで終わりじゃないですか。」

「だったら玉琥珀に卵を産ませて二世を作ればいいのよ?」  
「その前に繭がボロボロになります!」  
「うっ…」そんなことを話しているうちに魔の手は忍び寄る。

「瑞蓮様: 玉琥珀が: 肩にいますよ?」  
三寸以上の大きさの玉琥珀が瑞蓮の肩に鎮座まします中。

「イヤ ツ!!!!!! 私の身体に触れないで つ!!!!!!」  
あんなに可愛がっていた。  
それは触れなかったからこそである。  
?

~~~~~

玲蘭と玉蘭は今夜の宴の曲を練習していた。

見習いは珠付(女官付見習い)しか宴に出ることを許されない。北宮の新人女官の中で最も秀でて美しい玲蘭(さすがは見習い50人が追いかけただけのことはある)が翡翠で飾られた二胡を白くしなやかな手で弾いている。その側では初めて髪を結いあげた玉蘭が心配そうに何度も髪に手をやっている。「玲蘭様、本つつつ当にこれ、大丈夫なんですか。」

玉蘭は鏡を見ながら飾りを触る。「何が ?」  
「だって…きらびやかすぎるでしょう。」

玉蘭は十六歳。春、白木蓮がほころぶように咲くころ、誕生日を迎えたばかりの女官見習いが…白い薔薇の髪飾りと瑞々しい緑葉の流し飾りは、触れ合う度にシャランシャランと音を立てる。

「しかも、戸の向こうから尋常じゃ無いほどの殺気を感じるんですけど。」

「ん？私と玉がお揃いだからじゃない？」玲蘭はころころとおかしそうに笑いながら白い羽扇でフワフワと見習いの頬を撫でる。「多分、同期見習いだと思うんですけど……。明日の朝餉に毒が入ってても不思議じゃないです……。」

「何いつてんの、もう玉は私の物だもん。」玲蘭がそう言った瞬間、血の色をした珊瑚の簪がドスツと音を立ててふすまに突き刺さった。

「玲蘭様、やっぱりコワイです。明日にでも、私死にそう……。」

「……玉蘭を煙たがるのは私に対する威嚇……？消すわよ、ホント。」

自分が仕えているのは只の北宮女官ではないと、玉蘭は改めて悟ったのだった。

元花形妓女の隠し子で情報網が半端じゃない清 玲蘭。

「さ、行くわよ！その髪型のまま、堂々とね！！」

\*\*\*\*\*

「優奏様……。」南宮離れの庭で、景音は一人たたずみ、涙に暮れていた。

優奏が倒れて丸一日が経った。最低限の仕事しか手につかず、食欲もない。頭に浮かんでくるのは、優奏のことばかりだ。少しでも側にいて、世話をしたいと思ったが、ろくに人の身体も拭けない自分が何の助けになるうか。垢すりになっってしまう。

知識ある医女や医務官ですら、難しい症例で手間取っているというのに。

全く……幼いころから手伝いもせず本ばかり読み漁っていたからいけなかったのか。

初歩の生活知識と料理位習っておくんだった。

今頃、高い熱で苦しんでいるのだろうか。せめてその熱い手を冷やして差し上げたい。  
やりきれない悲しみに押され、景音は目に布も当てずにポロポロと涙をこぼした。

西宮の見習いに依頼されていた普段着一着を届けに行く途中、愛蓮は人影を見つけた。

「瑞蓮様、あの柱の側にいる見習いつて…。」 「景音…？南宮の？」

「ええ、そうみたいですよ。」 「泣いてるわね。」 「はあ…。」

「愛蓮を先に行かせて瑞蓮は一人で景音の元へ向かった。」

「景音…？」 年上の女官に自分の名前を呼ばれ、景音ははっと顔をあげた。

泣きはらした赤い目をかくそうと慌てて目を擦る。

「目は擦っちゃダメ。こつち向いて。」 瑞蓮は景音の赤くうるんだ目に、そつと柔らかく布を当てた。「どうして泣いているの？」

「優奏様が…持病の心臓発作でお倒れになってしまつて…。でも私は何にも出来なくて…。」

しゃくりあげながら景音はそのままだ つつと涙を流す。瑞蓮は自分の衣がびしょぬれになる前に大きい手布を出して景音の手に握らせた。

「景音、心配しないで。一緒に優奏様の所へ行きましょう。少しだけなら会わせてくれるかもしれないし。だから泣きやんで。ほら。」 さらに袖の下から先輩女官である朱羅しじろからもらった飴菓子あまがしを一つ取りだし、「はい、おいしいよ。」と子供レベルのなだめ方をした後、景音を連れ、瑞蓮は先に行った愛蓮を追いかける。

西宮門のすぐそばまで来ると、愛蓮が待っていた。「瑞蓮様、今お呼びした所です。」

「まもなく一人の見習いが愛蓮を見つけてやってきた。」「あら、杏苑だったの。」

「瑞蓮様、お久しゅうございます。」「女官任命式の時以来ね。元気だった?」

「はい、おかげさまで元気です。」「良かった。」「はい、じゃあこれ。桃色の上衣で亀甲紋。お代は銀十五枚ね。」「ああ、私の貴重なお金が。」「杏苑はふう、と哀しいため息をつくくと小さな巾着から銀貨を十五枚取りだし、名残惜しそーに愛蓮の手に乗せる。愛蓮はさっさとお金を仕舞う。」「景音? 瑞蓮様、なぜ南宮の琴 景音を連れていらっしやるのですか?」 「ああ、胡 優奏、この子の主が持病の心臓発作で倒れちゃってね。今様子を見に行く所なの。」

杏苑の顔つきがサツと変わった。「今から優奏様の所へいかれるんですね? 私も一緒にいたします。」

「へ?」

「杏苑は人助けに行った、と桃苑様に伝えて。」 彼女はさっさと歩きます。

「はあー?このかわい私を、愛憎渦巻く西宮に放り込まないでよ!!」一人残された愛蓮は肩を落としてそんなセリフを吐いた。

「杏苑、あなたついてきてどうするつもり?」杏苑はそれには答えず、「景音、優奏様の様子を詳しく聞かせて。」「ときびきびと聞く。景音は記憶の糸を手繰り寄せてまとめたことを一つずつ杏苑に伝え始めた。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「医務官様、脈が…。」 「弱ってきているのか。」 「はい…。」

「強心剤が効かないとなると…、どうしたものか」

杏苑は外で耳をそばだてていた。優奏様の治療は全く進んでいない自分なら、何とか出来るかもしれない。そう思った彼女は…、

「失礼いたします。」 杏苑は紺の女袴、山吹色の上衣、珠を通した紅い組み紐。

完全に空気読まない見習い女官の出で立ちで部屋の戸を開けた。(前置きするまでもなく失礼な行為だ。)

「私に優奏様の治療をお手伝いさせていただけませんか。」

「お前は西宮の見習い女官だろう。なぜお前が。」 医務官の問いかけに杏苑はバツとひざまずく。「おそれながら申し上げます。私の実家は医者の家系で、代々医术を施して参りました。私の父、れいめい明が村で、優奏様と似たような症状の患者を診ていたことがございます。それゆえ、私も何かお役に立てないかと思ひまして。」

「……。」 雑用にならと考える医務官に、杏苑は付け加える。

「治療法が掴めないのですよね？」 有無を言わずさつさと部屋に入り込んだ杏苑であった。

\*\*\*\*\*

「…う、ゆうそう。」 混沌とした意識の中で、誰かが私の名前を呼んでいる。

星琳様か…？ いや違う、このなめらかな優しい声は…懐かしいあの人。

- - - - - 陽柳様 - - - - - 私を救いあげてくださった方。

一緒に琵琶を弾いた。色んな料理を教わった。勉強を見てもらった

し、発作を起こした時はいつもそばで看病してくれた。――本当の家族のように育ててくれた。縹と浅葱の女官服。細くてもそのしつかりとした腕に抱かれれば安心できた。外出用の服も、市で布を買ってきて作ってくれた。すっかり小さくなってしまったが、大切な藤色の思い出は今も行李の中にある。陽柳様、今一度、あなたに会いたい。

「……っ！」口元にかすかなとろみを含んだ薬湯が流れ込んでくる。優奏はされるがままにのどに通す。やがて身体が少しずつ温まっていき……

「脈が落ち着いてきました。杏苑様のおかげです。」

「まだ足りないものがあるわ。」後ろから声がした。

白絹の上衣に群青色の襟、黒の袴。小さくまとめられた黒髪には桜の形をした貝細工と珠飾りのついた雅な簪が揺れている。

「……………珠桜姉上？」杏林。「珠桜という名の医女は妹にそつと歩み寄り、

げんこつ一発。「ゴン」「つつつ……。」頭を抱えてうずくまる杏苑に珠桜は言った。

「患者にそんなに一気に薬湯飲ませるんじゃないの！あなたは女官、私は医女。私のやり方を見ていなさい。」珠桜は静かに

優奏のそばに座り、注意深く脈をとる。彼女の頭が動くたび、サラサラと簪が音を立てる。

「姉上……」杏苑は立派な医女として成長した姉の珠桜を見つめた。医女修練学校の中で宮中に配属されるのは上位わずか三人のみ。その実力と誇りが彼女の顔ににじみ出ている。

珠桜が処置を終えるころには優奏は頬にほんのりと赤みが差し、静

かな寝息を立てていた。

「さて、お付きの不器用見習いちゃん。」 「うつつ」

珠桜に凶星を突かれて景音はぎくりとする。「もう大丈夫。時々手ぬぐいを替えて…、あと妹が作つてある薬湯を少しずつ飲ませてあげて。それと、杏林をよろしくね。じゃあ。」

結局姉妹がこの後話を交わすことはなかったが、これでいいんだとお互いに思っていた。私たちはすでに別の世界を生きていくのだから…とも。

\*\*\*\*\*

宮中の北宮殿、宴会場。夏服の萌黄色、艶やかな裾長の女官服に身を包んだ女官と十人の見習いたち。今夜の後半の目玉は玲蘭の幻の舞。本日の客人は女好きの官僚や王ではない。

北宮の華、清 玲蘭が仕える初老の女官だ。 スツと戸が開き、厳かな足取りで彼女 璃楼りろうが入ってくる。女官たちは音もなく完璧な礼で彼女を迎える。璃楼はその一人一人に応えながら真ん中の特等席に進む。なんとも美しい碧紗の打掛を皆に見せつけながら。「あの方が…玲蘭様の主様か…」玉蘭はほう、とため息をついた。

「皆様、準備が整いました故、始めてもよろしいでしょうか？」凜とした玲蘭の声が聞こえる。

真っ白な絹の衣に碧い紗布を巻き付け、薄化粧に紅をさした玲蘭が現れる。大きなどよめきと微かな感嘆のため息があちこちである。

蠟燭が吹き消され、あたりは暗く静かな帳に沈む。「始めるわ。」

隅四方のみ残された蠟燭の朱い炎がゆらゆら揺らめく。

その中央に玲蘭は跪いて頭を垂れる。少し顎を引いたのを合図に、玉蘭は香木の横笛で音を奏でた。

ピィ　　ツツと夜の静を破る、名も知れぬ鳥の声。その声に先導されてあちこちで音が鳴り始める・・・新しい朝。命の芽生え。生きとし生けるものが最も美しく輝く瞬間

玲蘭は今、それを表現しているのだ。白い衣はその「朝」を表し、碧い羅紗布はそれらを包み込む円い天を表している。一度も床に付くことのない碧い羅紗は宙にもともとから浮いているようだった。玲蘭の輝くばかりのその姿は神とも天女ともたとえられよう。

玉蘭が璃楼の方を見やると、彼女は温かさ溢れる瞳で玲蘭を見つめていた。

最後に玲蘭が布を空に向ってらせん状に回し、それを投げて自ら一回りしてから取った。その見事な技に大きな拍手が贈られる。玲蘭はその間一度も表情を崩さず、完璧な礼でもって舞を終えた。玲蘭は基本楽器担当なのだが今日は舞を。その理由は・・・

「玲蘭、ありがとう。あなたの舞を見れてもう思い残すことはありません。私は安心してここを去ることができます。」

「璃楼様・・・」玲蘭は声を震わせる。

他の何人かの女官たちも肩を震わせている。年配の璃楼は、幼くして家を出てきた女官たちの母でもあり、祖母でもあったのだ。「もしかして、他の女官が玲蘭様をうらやむのはこの理由じゃないかしらん」と玉蘭はひそかに思っていた。

玲蘭が着替えのために部屋を出て行ったあと、璃楼は他の女官たちと思い出話を始めた。五十歳近い璃楼には何人の教え子がいるのか・・・もう女官を育てる身分になった大人たちまで自分さえもが忘れ

てしまった昔話をせがんでいる。

璃楼はみんなに話を聞かせてやる。 幼い頃に家に帰りたいと  
いって泣いた子、西宮の子と共謀してつまみ食いした子がいたこと、  
練習をしすぎて楽器の弦を切ってしまった子 「そして、自分  
の育てた子のこと。」

みんな懐かしさと恥ずかしさに泣いたり笑ったりだった

玲蘭は服を着替え、白粉を落とす。むき出しになった自分の二の腕  
がみえた。真白い肌にも深く押し当てられた蝶の焼き印。お  
まえには掟を犯した妓女の血が流れていると、その印に長い間いわ  
れてきたような気がする。幸い周りからは何もなかったが。

彼女は自分用の抽斗から一本の髪ひもを取り出す。だいぶ古びては  
いるが、玲蘭にとってはただ一つの手がかりだ。母親が自分を産み  
落としたとき身に着けていたものらしい。

隣には玲蘭が初めて貰った子供用の簪。璃楼がこれを髪に挿してく  
れたことを今でも覚えている。優しく、温かい手だった。

「璃楼様…私は、周りが思っているよりも、強くはないのかもしれ  
ません…。」

手のひらの簪に大粒の涙が落ちる。

最上の女官と呼ばれても愛する人を笑って見送ることすらできない。  
永遠の別れの時を知っているからこそ、準備が出来るんだと思って  
いた。

準備してきた別れが、こんなにもつらいなんて思っていなかった。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「玉蘭はどの子かしら？」璃楼は人山の中を見渡して聞く。「あちらの白薔薇飾りの子でございます」先輩女官が耳打ちする。そう、と答えると璃楼はゆっくりと立ち上がった。静かな足取りで玉蘭に近づく。玉蘭はハツと気づいて礼をしようとしたがうっかり裾を踏んで転んでしまった。玉蘭は慌てて立ち上がり、ぺこりと頭を下げた。璃楼は静かに微笑むとそつと玉蘭を手招きした。

「あなたが玉蘭ね。素敵な名前なこと。」「ありがとうございます。私は貧しい家に生まれたものですから、せめて名前だけは高貴に…と季節の白木蓮の別称を付けられたんです。」

「自分の名前は大事にしなさい。親に初めてもらう贈り物なんだから。」「はい。」  
ところでお話ってなんでしよう？と玉蘭が聞くと、急に璃楼の顔が真剣になった。

「玉蘭。今から私が話すこと、玲蘭以外の人には喋らないと約束できますか？」

突然の問いかけに玉蘭は驚いたが、ややあつてゆっくりと頷いた。

「私が宮中を去る前に、話しておかねばと思ったのです…私と、玲蘭、そしてあの子の母親の事を。」  
「どうか、お話し下さい。私がしかと心に刻みつけます。」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

あなたの仕え人は大変な曰くつきの子よ。何しろ花街の花形妓女の子供なんですから。

皆が知っている通り、妓女が子供を孕はらんでいるのが分かったら容赦なく親子共々殺されるのが普通。関はわつたり、それを知っていながら庇はつたりした者がいればそれも同罪。

それほどまでに妓女が子供を作るということは禁じられていた。

でもね、それを破った妓女がいたの。玲蘭の母親。蘭英らんえいという名前だった。その名の通り、蘭の花のごとく華やかで麗しかった。その美しさに何人の男が花街を訪れたことか。気高く我儘、お付きの娘を何度泣かせた事だろう。でもそこが魅力的だったのかもしれない。大体の男とは客以上の付き合いはしなかつたみたいだけど、ある日訪ねてきた男と惹かれあい、情を交わしてしまう。 - 気付いた時にはもう遅かつたわ。蘭英のお腹には玲蘭という新しい命が宿っていたのだもの。墮ろすわけにも、産むわけにもいかない。けれどこの子に罪はない。そこで助けを求めたの。 - 当時唯一宮中での知り合いだったヨウリユウという女官に。二人はちょうど歳が近かつたこともあつて密かに顔を合わせていた。そんな彼女に白羽の矢が立つたのね。

ヨウリユウは北宮殿の女官　つまりこの璃楼に相談してくれた。普段は誰にも話さないことでも私にだけは話してくれる子だったから。私たちはとりあえず花街に足を向けることにしたの。最上階の小さくも立派に造られた一室「鈴の間」、そこに蘭英が横たわっていた。悪阻ですっかりやつれ果てて、か細い息で何とか生きている事が分かつた。

「蘭英様：大丈夫ですか？」私が声をかけるとひどい答えが返ってきた。

「落ちぶれた妓女のナリを見て笑いにきたんならさつさと帰って！でなきゃ今ここであんたを殺すから！」：まあ錯乱状態だったのか

しらね。ヨウリュウがとりなしてくれたおかげで彼女も落ち着いたけど。三人で話し合い、決定事項を決めたの。

- それはとてもとても危険な、失敗は許されない作戦だった。

二ヶ月後の冬の日：大雪が深々と降り積もる夜、蘭英は大変な難産の末、真っ白い肌の可愛らしい赤子を出産した。しかし、その子供に乳をふくませることもなく蘭英は息を引き取った。原因は産後の肥立ちの悪さだった。息を引き取る直前、横で眠る生まれたての娘をみやりながら、蘭英は最期に二人にこう言った。

見つかって殺されるよりも、こういう最期のほうがいいわね

この子をよろしくね。蘭の字をとった名前を付けてあげて

花街一の妓女蘭英のなきがらはひっそりと裏庭の隅に埋められた。

蘭英の望み通り、子供のことは私とヨウリュウが引き受けることになったの。

でも常に危険と隣り合わせだった。

生まれた子を玲蘭と名付け、養子という設定にして北宮に置いた。玲蘭は母親そっくりの美貌と楽器の腕を受け継いで、すくすくと成長した。お姉さん女官の前ではツンとしていても、私の前ではまだまだ甘えん坊の女の子だったわ。九年が経ち、もう大丈夫だろうと思っていた矢先、花街の使いが来てね…

「清 玲蘭をここへ。その子は妓女の娘だろう。」何処からか漏れ

たのでしょね。

必死の抵抗も無駄に終わり、ヨウリュウは宮中の離れに幽閉されてしまった。玲蘭は私の懇願で殺されずに済んだが、その代わり消えない刻印を身体に刻まれることになった。

飛べない蝶。 美しさゆえに閉じ込められた、玲蘭と蘭英を表しているようだった。

そのあと、ヨウリュウはその事件のせい、五年後に命を落としたわ。たしか…ユウソウっていう名前の養い子がいたっけね。」

璃楼がそこまで話し終わった時、バタンと物音がして戸が開いた。そこには玲蘭と、玲蘭に支えられた優奏が立っていた。どうやら抜け出してきたようだ。

「あの…璃…楼様、陽柳様のことを御存知なのですか？」

「ええ、知っていますとも。あなたの事も良く話していたわ。賢くて、優しく、涙もろくて…とても可愛い子だった」

「…。」優奏の目に、早くも涙がこみ上げる。

「玲蘭。貴女のことをこの子に全て打ち明けました。でももう一つ言っていないことがあります。貴女の舞は、母親の蘭英にそっくりね。目を付けられないようにと私は部下たちに、貴女を楽器担当にするようにと言ったのです。本当は見たくてたまらなかった。」

だから今夜、最後の夜にと頼んだのです。素晴らしかったわ。これからは安心して仕事をなさい。それと玉蘭。くれぐれもこの子をよろしく願いますね。」

「璃楼様！！今夜…今夜一晩だけ私と過ごしていただけないでしょうか…」

玲蘭の顔は必死にすがりつく幼子の表情に戻っていた。

次の日……。全ての部署の女官たちが見送る中、璃楼は引退生活を送るべく迎えに来た駕籠に乗りこんだ。璃楼に世話になった北宮女官たちは泣きじゃくっていたが、その中で玲蘭は只一人しっかりと恩師を見送った。艶やかな黒髪に刺さる古い簪を、爽やかに駆ける夏の風がシャラン、と揺らした。

春風伝　　く夏の章く　　完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1900z/>

---

春風伝

2011年12月13日10時47分発行